

アジアの 蚕

第3号

2001年 11月 15日発行

題字・カット: 宋 貴美子

編集・発行 アジア児童文学日本センター (株) 日本児童文学センター

2002年8月 大連市で 第6回アジア児童文学大会開催

去る9月10日、中国遼寧省児童文学学会会長（亜細亜児童文学学会共同副会長）の趙郁秀氏から第6回アジア児童文学大会を2002年8月、中国遼寧省の大連市で開催する旨、正式に通知がありました。その詳しい内容は次の通りです。

- | | |
|--------|---|
| ◇期 日 | : 2002年8月21日～8月25日 |
| ◇場 所 | : 大連市 |
| ◇使用言語 | : 英語、日本語、韓国語、中国語 |
| ◇大会テーマ | : 平和・発展と新世紀の児童文学 |
| ◇サブテーマ | 1. 平和・発展と児童文学精神の向かうところ
2. 環境保全、エコロジー文化と児童文学
3. インターネット文化、TV、映画、アニメーション等マルチメディアと児童文学
4. 文学の傾向（ポストモダン、フェミニズム、暴力、性表現等）と児童文学
5. 幼年文学、絵本と児童文学
6. 現代児童の生存状況と児童文学
7. その他 |

なお大会参加費はUS\$500（往復交通費は自己負担）。参加申し込みは本年（2001年）末までで、論文発表者は2002年3月5日までに論文送付となっています。

参加申し込みや論文発表、渡航手続きなどについての情報については、今後当センターを窓口として収集・提供していきます。参加申し込みや渡航手続きは各自でお願いしますが、参加される方は必ず当センターにご連絡ください。連絡先は当センター事務局（花井都茂子方）Tel.0568-95-0091、または成實朋子方 Tel.0532-48-7833です。

富山県大島町絵本館で第2回研究会 2001年10月8日

君島久子氏の講演「アジアのシンデレラ物語～『銀のうでわ』をめぐって



当センターの第2回研究会が、去る10月8日富山県大島町の絵本館で開催され、約50名の方がたが熱心に君島久子氏の講演を聴講されました。（当日の講演要旨は3頁に掲載）

しかた会長の挨拶について、(財)大島町絵本文化振興財団理事長を務める大島町長の吉田力氏から歓迎の言葉をいただきましたが、その中で来る2004年のアジア児童文学大会への協力の意向を表明されました。高井館長さんをはじめ、絵本館職員の方がたやボランティアの方がたの温かいご協力を得て、盛況裡に研究会を終えることができました。心から感謝申し上げます。

2004年に向けての取り組み ～これまでの経過と展望

2004年の第7回アジア児童文学大会を名古屋市を中心に開催するべく、当センターはこれまで準備をすすめてきましたが、これまでの経過をここに報告し、併せて今後の具体的な取り組みについてもご連絡をいたします。センター会員の皆様をはじめ、関係の方々、関心をお持ちの方々のご理解を賜われれば幸いです。

1. 関係機関への企画書提出

2001年3月、「第7回アジア児童文学大会 in 名古屋企画書」を愛知県、名古屋市、名古屋観光コンベンション・ビューローなど関係機関に提出しました。

その内容は、まずこの大会がアジアのすべての地域における児童文学・児童文化の発展と相互の交流をめざすものだという大会趣旨を述べたあと、次のような計画概要を示しています。

- ① 開催時期 平成15年8月1日～5日
- ② 開催期間 5日間
- ③ 開催会場 名古屋市青少年文化センター
- ④ 主催団体 愛知県、名古屋市、名古屋市文化振興事業団、名古屋観光コンベンションビューロー、アジア児童文学日本センター、日本児童文学者協会
- ⑤ 予算 約2000万円
- ⑥ 参加規模 延べ2300名
- ⑦ 大会内容
 - ア. 全体テーマ「アジア児童文学の可能性」
 - イ. 研究発表 7国・地域から30名
 - ウ. 公開プログラムⅠ「アジアの文学風土をめぐって」(ミュージカルと講演)
 - エ. 公開プログラムⅡ「アジアの詩人朗読の夕べ」
 - オ. 公開プログラムⅢ「アジアの風を聞く～東アジアの民族音楽」
 - カ. 児童文学研修ツアー

2. 期日変更等の経過報告

中国で開催予定の第6回大会が2002年に延期されることになったために、「第7回大会も1年遅れの2004年開催ということになります」という期日変更の報告を2001年6月、関係機関に行いました。

また富山県大島町での開催については、「絵本館という施設が、日本以外のアジア諸国には存在しない現状

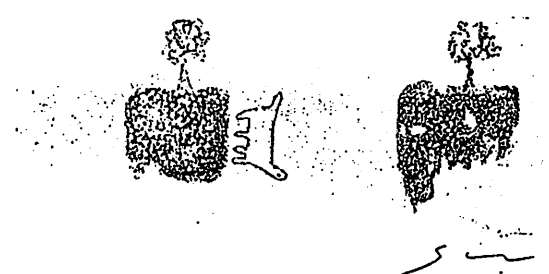
からすると、この町営の絵本館を見学し、絵本による交流を深めることはアジア各国・地域からの参加者にとってきわめて有意義なことであると考え、「応分の経費分担を前提に、絵本館との共同開催をめざしていること」を報告し、別表のような大会プログラム案も提示したような次第です。

3. 今後の取り組み

今後の具体的な取り組みとしては、来春(2002年)4月に関係機関の代表による第7回アジア児童文学大会実行委員会を設け、大会のテーマ、日程、プログラム、予算などの基本的事項について協議し、決定します。その決定に基づき、8月下旬中国大連市で開催される大会において第7回大会の日本での開催を宣言し、了承を得るということとなります。

したがって、それまでに大会の基本的事項は実行委員会で決定されていなければなりません。また、大会のテーマやプログラム内容についての率直なご意見や魅力的な提案を、この時期までに皆さんからぜひいただきたいと思っております。

そのほか、特に力を注がなければならないのが、公的な補助金や民間団体からの助成をいただくための折衝です。この点についても皆さんからの情報提供やアドバイスをお待ちしております。



2004年アジア児童文学大会プログラム (案)

	開閉会	研究発表	シンポジウム、イベント等	レプション	宿泊地
第1日	参加者受付			前夜祭	名古屋市
第2日	参加者受付 開会式		①親と子のミュージカル「アジアの昔話」 ②講演会「アジアにおけるファンタジー」	歓迎レプション	名古屋市
第3日		15名	③「アジアの詩人朗読の夕べ」		名古屋市
第4日	移動・研修		大島町絵本館見学	歓迎レプション	大島町
第5日		10名	④シンポジウム「絵本の民族性を考える」 ⑤音楽と語り「東アジアの風をきく」		大島町
第6日	閉会式	5名	⑥総括討論「アジア児童文学の可能性」		

アジアのシンデレラ物語～『銀のうでわ』をめぐる

国立民族学博物館名誉教授 君島久子氏

1. 絵本『銀のうでわ』

絵本『銀のうでわ』は中国四川省の彝族に伝わる「阿茨姑娘」という伝承をもとに再話したものである。中国をはじめ東アジアの各地にはいわゆる「シンデレラ」物語が数多く伝承されているが、特にこの話を選んだのは、馬に乗って走り去るシンデレラ、そして空飛ぶ馬というイメージがすばらしいと思ったからである。また馬に乗る人たちは靴を落とすようなことはないだろうということで、「腕輪」の出でくる話を選んだのである。なおこの《銀のうでわ》は両腕につけるもので、その持ち主しか着けられないように作られているという。

2. 最古のシンデレラは中国に

世界各地にシンデレラの話が伝承されているが、最も古いのは唐の時代（9世紀）に段成式が著した『酉陽雜俎（ウヨウザツ）』続集巻一に記された葉限（ヨウゲン）の物語である。この話は南方熊楠が発見し、明治44年『東京人類学会雑誌』に発表したことから世に知られるようになった。ヨーロッパにおけるシンデレラの古い記録は、ナポリ方言で書かれたG. バジレの『ペンタメローネ』（1634～36）中の一篇だとされており、中国のシンデレラ物語はそれより800年ほど早いということになる。

3. アジア各民族の伝承

中国大陸を中心とする東アジア地域にこのシンデレラ伝承がどう分布しているかを見ると、漢民族にはこの伝承が少ないので、中原を除いた馬蹄形のようなかたちで広がっている。すなわち、南部では海南島のリー族をはじめチワン族や苗族にこの伝承が見られ、西南部では彝族やペ族、西部ではチベット族、北部ではダブル族や朝鮮族などにそれぞれ伝承されている。さらに朝鮮半島、ヴェトナム、タイ、さらには日本にも同様の伝承が存在している。

一般にアジアのシンデレラ伝承では、ヨーロッパの伝承のように主人公がすばらしい結婚をして《めでたしめでたし》という終わりがたをしない。絵本『銀のうでわ』にも見られるように、主人公がその後何度も死んでは、またよみがえるという《死と再生のドラマ》があるのが特徴的である。

4. 靴をはいたシンデレラ・はかないシンデレラ

アジアの伝承においても、チワン族やハニ族、さらに朝鮮半島やヴェトナムの伝承には靴をはいたシンデレラが登場する。しかし、靴をはかないシンデ

レラも多く、タイ族、リー族、トン族、ミャオ族などの伝承には靴が現われない。日本の伝承も同様である。さらに靴をはかないシンデレラには馬にのったものがおり、「銀のうでわ」はそのひとつである。

なお、シンデレラを守護するものとしては、母親の靈魂（変身、転生など現われ方は多様である）のほか、山姥、仙女、魚、牝牛、鳥、樹木などが挙げられる。

5. シンデレラの靴

シンデレラのはく靴に注目してみると、ペローの書いたシンデレラはガラスの靴をはき、グリムの昔話では純金の靴をはいている。ヨーロッパの伝承では、このように堅い靴をはいているものが多く、それだけにいわゆる「シューテスト」がきびしいものとなる。そこから、靴に合わせて足の指やかかとを切るという「足切り」のモチーフが現われる。なおB. ベッテルハイムは、こうしたシューテストには無意識的なセックス・アピールがこめられているのだという見解を示した。

これに対して、アジアのシンデレラ伝承ではさまざまな履物が現われる。例えば葉限の話では、主人公は軽い靴をはき、石を踏んでも音がしない。なおアジアの話では、靴を両方そろえてはくと課題が解決されるという展開が多く、また靴を媒介にした婚姻の習俗が見られる。

6. 対の思想

アジアにおいては、一般に一對の組み合わせを重んずる「対の思想」とでも言うべきものがいろいろな習俗の中に現われている。アジアのシンデレラ物語においても、そうした「対の思想」が根底にあるように思われる。すなわち、靴とか腕輪（両腕に着ける）とか一對のものがぴったり合うということが重要な要件として示される。また人物の呼び名、特に姉妹の呼び名が「ターカ・タールン」「米福・粟福」「タムとカム」などのように対比的に表現され、それによって善と悪との対比を具体的に表現している。さらに話の構成という面においても、アジアの伝承では前半は「孤児と幸せな結婚」、後半は「死と再生」がそれぞれ「対」となって展開されていくのである。このようにアジアのシンデレラ伝承には、ヨーロッパのそれとは異なる世界が展開されている。そういうことを念頭において『銀のうでわ』を読んでいただくのもおもしろいのではないだろうか。

（文責：畑中圭一）

アジアに目を向けて——施設、研究所紹介

大島町絵本館（富山県射水郡大島町鳥取50）は1994（平成6）年8月に開館され、これまでの入館者はすでに30万人を越えています。町営の絵本館というユニークな施設が生まれたきっかけは、1988年、開町百周年を記念して発刊された『おしま ふるさとのえほん』でした。これを起点に大島町は、ふるさと創生事業として「絵本文化」推進事業に乗り出し、絵本会議やシンポジウムの開催、『絵本通信』の発行などを経て開館されること

になったということです。

「感じる」「つくる」「伝える」をコンセプトとして絵本原画展、創造セミナー、絵本創作教室、コンサートなどさまざまな事業を展開していますが、なかでも注目を集めているのが全国規模の「手づくり絵本コンクール」です。今年度からは国内だけではなく、韓国・中国などアジアの国々にも参加をよびかけていくことになりました。

今後、絵本を通しての国際交流を深めようと高井進

Feel Make Tell

大島町絵本館

夢 創造



館長をはじめ職員の方々は意欲的です。その一環として、2004年開催予定のアジア児童文学大会への協力にも前向きに取り組んでいただいております。

去る10月8日、この絵本館を会場に当センターの研究會を開催した際にも、吉田町長が挨拶をされ、アジア児童文学大会には絵本館としてできるだけ協力をしたい旨のありがたい言葉をいただきました。

開館時間	午前10時～午後6時
休館日	月曜日、月1回整理日、年末年始
入館料	大人 500円 中高生 300円 小学生 100円
交通案内	JR高岡駅から車で20分。JR富山駅から車で30分。JR越中大門駅・小杉駅から車で5分。北陸自動車道小杉ICから車で10分。

北東アジア文化総合研究所

鳥取女子短期大学（現・鳥取短期大学）に併設される研究所として1994年に設立。以来、開かれた研究所として、北東アジアを中心とした各地域の文化研究と紹介を進めていますが、最近では、韓国の調査・研究に特に力を入れています。

所長をはじめ、研究員は学内の数名の教員で構成されており、研究課題もそれぞれの学問分野により、多岐に及んでいます。

児童文学・児童文化の分野としては、主に絵本の研究がなされています。今から5、6年前、その当時出版されていた唯一の邦訳絵本『山になった巨人—白頭山ものがたり』（福音館書店）から始まり、新しい作品では『こいぬのうんち』（平凡社）、未邦訳絵本『カマンナラエソ オン サブサリ』（チョン スンガク作）、あるいは在日韓国・朝鮮人作家の手になる作品など、絵本の研究と紹介に努めています。残念ながら、現在のところ児童文学に関わる研究員は1名しかおりませんが、「絵本を異文化理解と国際認識の契機に資したい」と願いつつ、研究テーマを提起して研究に従事しています。

各分野の研究成果は研究紀要『北東アジア文化研究』（年2回）として発表されており、この紀要には文化研究に携わる内容であれば、外部からの投稿も受け付けています。その他『北東アジア文化通信』（年2回）も刊行しており、これらの刊行物の希望者には、研究紀要（1000円）＋送料実費で送付もしています。（齊木恭子）

★問い合わせ先

〒682-8555 鳥取県倉吉市福庭854

鳥取短期大学 北東アジア文化総合研究所

Tel. 0858-26-1811

Fax. 0858-26-1813

『北東アジア文化研究』第13号 2001年3月

齊木恭子「韓国絵本『こいぬのうんち』に関する一考察」
大西瑞香「韓国伝統音楽の継承」ほか

あいち国際プラザ

あいち国際プラザ（財団法人・愛知県国際交流協会）は愛知県庁の近く、三の丸庁舎の1・2階にあります。世界の国々の情報収集の場として、また交流を深め、広げる場として設けられた施設です。特に2階にある図書室は、各国の文化理解や国際交流関係の図書を中心に約7000冊の蔵書を収め、貸し出しもしています。アジア関係の図書も多いので、一度訪ねてみてはどうでしょうか。

図書室の前の「新聞・雑誌コーナー」も豊富な内容で、気楽に利用できます。

◇利用案内

開館日・時間

月曜日から土曜日まで 10:00～18:00
(金曜日は20:30まで)

休館日

日曜日、祝日及び年末年始
(図書室は2月の図書整理期間も休室)

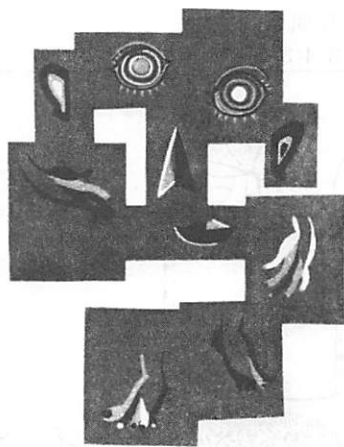
◇問い合わせ

電話：総務 052-961-8744

第7回大会のエンブレム

早々と使っています

名古屋市を中心に開催しようと準備をすすめている第7回アジア児童文学大会のエンブレムは、すでに宋貴美子さんの手になるものが理事会で承認されています。目、耳、鼻、口、そして手と足がカラフルにデザインされ、すべての感覚と器官で触れ合いを深めようというメッセージがこめられています。ここに載せたのは、印刷がはっきりしていませんが、当センターの封筒に早々と使われたものです。



BOOK REVIEW

十四歳の森林

(董宏猷著 家野四郎訳 文芸社刊 1300円)

成実 朋子

長江三峡は中国四川省と湖北省にわたる中国最大の峡谷である。両岸には断崖絶壁がそびえたち、長江の水はその間をぬって激しく流れる。三峡は長江最大の難所であり、三峡下りは中国を代表する観光スポットの一つとなっている。しかし旅人の多くはその近くにある中国有数の原生林「神農架（シェンノンジア）」のことは知らない。千年を超すと言われる大木、野生動物、植物の宝庫である神農架には、古くから「野人」の伝説もある。

物語の舞台はそんな山奥の森林である。1960年代初頭、中国は都会の青少年たちに農村や森林で働くことを奨励した。それは自然災害で受けた山野の復興という名目ではあったが、一方では都会の青年たちの就職問題を解決するためでもあった。神農架近くの営林署へもそんな都会の青少年たちがやってきた。革命的思想に燃えた青少年たちは、歳を偽り、親の制止をもふりきって、自ら志願して森林にやって来たのだが、厳しい自然や慣れない肉体労働に、当初の理想は揺らぎはじめる。しかし様々な事件を通して、子どもたちの間には一種の連帯感が生れ、互いに硬い絆で結ばれ始める。十四、五歳の男女の間には、当然恋愛感情も生れる。しかしそれを引き裂くのが俗世の「出身階級」である。出身が労働者階級や革命幹部等であれば良い出身、地主や資本家、知識人階級等は悪い出身とされ、結婚や就職に影響した時代のことである。物語はそんな「革命烈士」の娘林秀英（リン・シュウイン）と、匪賊の息子劉剣飛（リュウ・チエンフェイ）の悲恋を軸に展開され、それはまた来たり来る文化大革命の予兆ともなる。厳しい自然の中で、子どもたちは大人になることを余儀なくされ、それでも人を愛し、裏切り、信じていく。そしてそんな人間たちの営みをゆったりと飲み込むかのように存在する大自然の描写が魅力的である。

作者董宏猷は中国を代表する中堅作家。自身の体験や森林への思い入れがたっぷりと詰まったこの小説は彼の代表作とも言える。惜しむらくは作者の思い入れが過ぎて、やや冗長な部分があること。また訳者もその思いに引きずられたのか、中国語の表現そのままの箇所が散見され、結果として分かる人には分かるという、一般の読者にはやや不親切な訳文となったことである。しかし上下二段500頁近くの労作を形にした、その熱意には敬意を表したい。読んでいくうちに自身も大自然へと包まれていくような気持ちになる。

BOOK REVIEW

李芳世詩集

『こどもになったハンメ』

(遊タイム出版刊)

梓 加 依

在日朝鮮人の李芳世はずっと母国語である朝鮮語で詩を書き続けてきた。そのために日本人にはあまり馴染みがないが、在日の中では詩人としてよく知られている人である。この詩集は彼が日本語でまとめた初めての詩集である。戦後50数年を経て在日の社会も変化してきた。母国語を習えなかった人たちもいるし、日本人の親を持つ子どもたちもいる。彼はその子どもたちや同胞に向かってこの詩を届けようとしている。そして日本人にも在日の心を知ってほしいと思っている。

<好きな人>

好きな人がいます
思い浮かべるだけで 胸がキュンとなり
ワクワク ドキドキします
その人さえいれば
ただそれだけで
嬉しくて 楽しくて
幸せいっぱいになります
それはカバンを揺らしながら走っていく
子どもたちかもしれません
夜 朝鮮語を教える若者かもしれません
学校のためにキムチを売る
オモニかもしれません

ぼくには好きな人がいます
強く抱き締めたいほど
愛する同胞(ひと)がいます

彼は、日本にいて精一杯の生き方をする同胞たちがいとおしくて抱き締めたいとサラリと詩う。「苦しくつらい」という言葉はどこにもない。けれども私は、この中にどのくらいの涙が隠されているのかを知って、思わず胸がつかえる。

<鮭>

数万キロの海を幾年も泳ぎ続けて
鮭は故郷に帰ってくるという

—— 略 ——

鼻は砕け 身は擦り剥け
ただ一心に上流に向かって

—— 略 ——

テレビをみていたハルモニがぼつりといった
「魚も故郷で溶けてしまいたいんや」

ハルモニ(祖母)を見つめる詩人は、ハルモニの故郷への想いを、せつなく、しっかりと受けとめる。ハルモニがいた朝鮮半島は一つだった。その思い出の中にある一つの朝鮮半島で彼の母国語の詩が読まれることを夢見ている。

彼は確かに在日朝鮮人の心を持っている。しかしそれは日本に対するうらみつらみではない。子どもへの想い、親への想い、故郷への想い、そして人間への想いが切々と伝わってくる。「人を愛すること」が溢れている。凍りついた心がふあーっと溶けだしてしまうような温かさが広がる。

<いしころ>という詩がある。

なあんかしらんけど/むしゃくしゃして/石ころをぼんとけた/石ころは怒りもせんと/黙ってころがってくれた

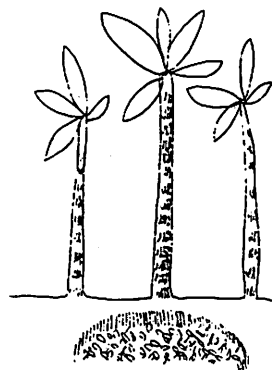
彼はこの石ころのような人である。彼の兄の奥さんは日本人である。そして日本人である私も大切にしてくれる友だちである。いつか彼が朝鮮半島でこの温かい詩をたくさん発表してくれることを私も祈りたい。

小 耳 情 報

“The Asian Club Monthly”(アジアクラブマンスリー)という雑誌が財団法人アジアクラブ(東京都港区)から刊行されています。表紙を含めて12頁という小さな雑誌で、約半分は経済・産業関係の記事ですが、音楽、美術、映画、エコロジイ、旅行関係の記事も読み応えあり、さらに「アジア文学散歩」という欄では、「インド、南アジア系作家の英語文学」という連載が始まっています。アジア関係のイベント情報も掲載された、スマートな雑誌です。

◇定期購読は年間3000円

◇Tel.03-3435-6071



//////////風のたより//////////

馬場 與志子さんから

——張桂娥さんの論文の意義——

河野孝之氏の紹介でやってきた張桂娥さんと、小倉駅で水上平吉氏と共に会ったのは、今年の7月10日だった。レストランで昼食をとった後、水上宅に行き、彼女は、水上氏が翻訳紹介した中国や台湾の作品について熱心に聞いていた。私は翌日私の家で会うことを約して、先に辞去した。

翌日、彼女は私の家で同じように取材した後、帰京してから、片桐園さん宅も訪問したようだ。

関西の中由美子さんたちとは、数日前に会って来ていたらしい。

このようにして、精力的に中国児童文学翻訳者を訪問取材した後にまとめ上げたのが、「日本における中国語系児童文学作品翻訳紹介の概況——児童文学研究団体及び同人雑誌を中心に」という論文である。

張桂娥さんは、東京学芸大学大学院博士課程に在籍の台湾からの留学生で、今回「小さい旗」「中国児童文学」「世界の子供たち」「虹の図書室」「こだま」「合掌」「青い地球」などの雑誌の初版までさかのぼって、まずは翻訳発表された中国語系の児童文学作品について中国大陸、台湾、マレーシアなどの地域を区別せずに調べた後、台湾の作品の翻訳紹介に焦点を絞って、研究発表しているのだ。

私たちの同人雑誌「小さい旗」についても、水上平吉氏が、1956年から68篇、私が1990年から23篇翻訳発表したもの（台湾以外のものも）を、全部調べて、一覧表にして送って下さった。

聞けば、「虹の通信」で彼女自身が書かれるそうだから、内容については触れないが、来年大連で開催されるアジア児童文学大会でも、台湾の作品に絞らずに発表して下さいれば、交流の実態が分かって、一層意義あることではないかと思われる。

砂田 弘さんから

——自問自答の三十年——

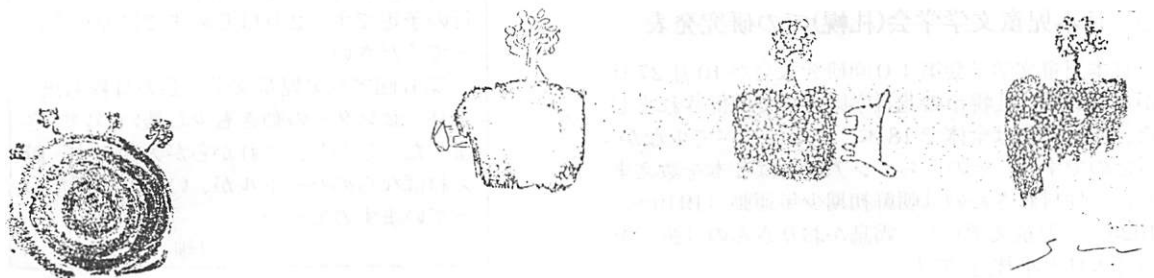
私は日本統治下の韓国で生まれ、幼少期を過ごしたのだが、その体験に基づく作品を殆ど書いていない。「なぜ子ども時代のことを書かないのか」とこれまで友人に何度訊かれたことか。それは三十年もの昔、私と同世代の韓国のジャーナリストの次のような一文に出会ったショックが余りにも大きかったからである。

彼は日本帝国主義によって「幼い日を侵略」された一人だが、苦渋をこめてこう書く。「しかし、彼らの不幸は、日帝下の彼らの幼き日がいずれも不幸だったというところにあるのではない。かえって、まさしく日帝時代であったにもかかわらず、彼らの幼き日が、すべての時代、すべての社会の幼き日と同様に幸福だったという事実にあるといえる」（雑誌「文学」1970.11.）

そう。私にとっても幼少期は人生の至福期であった。児童文学を志したからには、『クマのプーさん』や『銀の匙』には遠く及ばないにしても、私なりの幼い日の世界を書いてみたい。しかし、その私の至福期が私と同時代を生きた韓国の子どもたちの至福期を踏み台にしたものであったという事実は揺るがないとすれば、この課題にどう立ち向かえばよいのか。植民者の子の私には責任はなかったとはいっても、たじろがざるを得ない。立ち止まっているうちに年月は流れ、私はいま七十の坂を間近かにしている。

折しもテレビのニュースの画面に、戦火の下で生まれ育ったアフガニスタンの子どもたちが廃墟で遊んでいるのが写しだされるのを見て、私はまたたじろぐ。彼らにこうした至福期しか与えられない責任の一端は、明らかに私にもある。アジア全体では、このような子どもはおそらく億を越えるだろう。

「世界ぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」という宮沢賢治のことばを改めて思い出す。それを踏まえて幼い日の世界が書けるかどうか、私は深い溜息をついている。



風のたより

——編集室からの Information——

◇ 静宜大学児童文学論文集

亜細亜児童文学学会の共同副会長をつとめる台湾の趙天儀さん（詩人・静宜大学教授）が8月末に来日され、わずかな時間でしたが、歓談することができました。2年ぶりの再会です。今回の来日は、美学会・立命館大学などの主催する国際シンポジウム「芸術のアジア～外からの眼差しと内からの応え」（9月3～4日）への出席が主な目的で、台湾代表として報告をされたようです。それに先立ち、8月31日から3日間奈良に滞在（国際奈良学セミナーハウス）されたので、9月2日にセミナーハウスでお会いしました。その際、5月に静宜大学文学院から刊行された論文集『第5届「児童文学與児童語言」學術研討論文集』をいただきました。中国語の読めない私には「猫に小判」だと思ったのですが、16篇の論文中になんと日本語の論文が1篇入っていました。鄭元真（静宜大学）さんの『『トムは真夜中の庭で』における時空の意義』という17頁の論文です。「庭園」という空間のもつ意義と、人間存在とのかかわりで見えた「時間」のはたらきについて、先行論文もしっかりととらえた真摯な論究です。ほかに英語の論文も1篇収められています。

目次を見ると、「夢幻與現実之間」「現代幻想作品中的第二世界架構」「楊喚童詩中的幻想世界……」といった言葉が目立ちます。私のおぼつかない漢字知識でも、これがFantasy中心に編まれた論文集であることがわかります。読もうという方にさしあげますので、畑中まで（Tel. 0774-72-9199）ご連絡ください。

◇ 齊木さんの『こいぬのうんち』論

施設紹介のところで紹介した『北東アジア文化研究』の第13号に、齊木恭子さんの『こいぬのうんち』論が載っていたので、一読。A5判16頁にわたる本格的な論文です。特に作家権正生についての詳しい論及と第4章『こいぬのうんち』にみる作家の位相』が注目されます。ただ、この絵本の絵や画家についてはほとんど論じられていないのが残念でした。

◇ 日本児童文学学会(札幌)での研究発表

日本児童文学学会第40回研究大会が10月27日から3日間、札幌市の北星学園大学で開催されました。研究発表は全体で18本。例年に比べて少なかったのですが、そのうちアジア関係は2本を数えました。仲村修さんの「朝鮮初期少年運動（1919～1925）と児童文学」と、霜鳥かおりさんの「張天翼の『大林と小林』」です。

仲村さんの発表は、3・1独立運動後に生まれ、民族的アイデンティティの堅守と社会参加に寄与したさまざまな「少年運動」の実態を、当時の資料にもとづく綿密な調査によってまとめたものです。この少年運動は、朝鮮半島における近代児童文学の発展に深く関わりがあり、この解明は朝鮮児童文学史研究上きわめて意義深いものと思われまます。霜鳥さんの発表は張天翼の長編童話「大林と小林」（1932年）を取り上げた作品論で、この作品が成功した要因として昔話を下敷きに書かれていることや、表現上の工夫、豊富な空想などを挙げた精緻な分析が注目されました。

◇ 韓国の李教授古稀記念出版

11月2日、かなり重たい小包が韓国から届きました。開けてみると、雑誌『児童文学評論』第100号と、韓国児童文学学会の紀要『韓国児童文学研究』第8号、第9号（共に李在徹教授古稀記念並びに『児童文学評論』25周年100号記念特集）、さらにこの第8号と第9号を1冊にまとめた987頁の大著『韓国現代児童文学作品作家論Ⅱ』が入っていました。ここには53名の作家・詩人・研究者をとりあげた論文・評論が収められており、現代韓国児童文学の一大パースペクティブになっています。そのほか李教授の詳細な年譜や、各国の児童文学者からの李教授古稀を祝うメッセージも掲載されています。日本からはしかた・しん氏、鳥越信氏、それに私のメッセージ（祝辞）が載っています。国際児童文学学会（IRSC）の会長を務めたドイツのドーデラー博士、オーストラリアのロンダ・バンベリイさん、スウェーデンのM. ニコラエヴァさんなどの祝辞も見られ、李教授が国際的にもよく知られていることがわかります。ここで改めて李教授のこれまでの業績をたたえるとともに、韓国児童文学の一層の発展を望みます。

あとがき

「アジアの風」第3号をお届けします。この号は原稿の集まりが思わしくなく、かなり苦勞しました。会員の皆さんの積極的な寄稿をお待ちしています。次号は3月発行の予定です。2月はじめまでに原稿を送ってください。

第6回アジア児童文学大会の日程も決まり、センターの動きも少し勢いづいてきました。しかし、これからが大変です。越えねばならぬハードルが、いっぱい横たわっていますので……。

（畑中圭一）